

春から初夏へ・・・

桜花を見送った頃が百花繚乱の季節。



心の開国

— 尾崎号堂と相馬雪香 —

桜が平和の使者としてワシントンに贈られたのは1912年（明治45年）。日露戦争を講和に導いたアメリカに対する感謝の気持ちから、当時の東京市長の手により寄贈されたのである。時を同じくして平和活動に一生を捧げたある女性が誕生した。

— 相馬雪香 — 桜の送り主、東京市長を父に、明治高官の娘であり日英に血をわけた聡明な女性を母にもつ。その父こそ憲政の神様と讃えられた号堂・尾崎行雄である。彼女は、幼少時代を大正デモクラシーの中で育ち、やがて英国で学び父と共に諸外国を歴訪。世界でも有名な平和活動家として偉業を成し遂げた。

『Not Mines, But Flowers』—地雷ではなく花をください—

ベストセラーとなった地雷廃絶運動の絵本である。各ページ日本語の文章の下に付されている英訳はすべてAAR（難民を助ける会）会長の相馬雪香によるもの。

彼女は訴え続けた。「世界を変えるためには1人1人の努力がものをいいます。」

世界全体に埋められた対人地雷は一億個に及ぶといわれる。その気の遠くなるような撤去作業、果てることのない課題に彼女は淡々と取り組み続けていたのである。

真の民主主義と世界平和の実現を終始説き続けた政治家、父号堂。「人生の本舞台は将来にあり」という生涯現役の姿勢。彼女の中には父から譲り受けた「反骨」と「勇気」の遺伝子、熱い血と真摯な思いが脈々と生きつづけていた。

相馬雪香。心の開国を唱え、いぶし銀のような静かな光を放ち、21世紀を照らしつづけてきた生涯を終えたのは、2008年（平成20年）11月8日、紅葉が美しく色づく晩秋の頃であった。

平和の使者、桜が海を渡ってから3年後、アメリカから返礼として贈られてきたのはハナミズキの苗木である。

新緑の中、陽光を浴び煙るように美しく咲くハナミズキ。

そして春がめぐってくるたび、ワシントンポトマック河畔は桜の花で美しく彩られる。

永遠に・・・。

桜とハナミズキは日米の親善の歴史を物語る花
ハナミズキの花言葉 … 返礼

- ❁ 号堂尾崎行雄 （相馬雪香／編著 富田信男／編著 青木一能／編著 慶應義塾大学出版会 L289／オ）
- ❁ 心の開国を 相馬雪香の90年 （西島大美／著 中央公論新社 L289／ソ）
- ❁ 地雷ではなく花をください （葉祥明／絵 柳瀬房子／文 相馬雪香／英訳 自由国民社 E／ジ）
- ❁ 平和活動家相馬雪香さんの50の言葉 （石田尊昭／著 世論時報社 L289／ソ）
- ❁ 尾崎行雄 「議会の父」と与謝野晶子 （上田博／著 三一書房 L289／オ）

図書館だより
2011年5月号より